

Nara Women's University

巻頭言「新世紀の情報処理センターへの期待」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学情報処理センター 公開日: 2014-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久米,健次 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/3846

新世紀の情報処理センターへの期待

副学長（研究・企画担当） 久米 健次

奈良女子大学に情報処理センターが設立されてから12年になり、暦が一回りしたことになります。この間の情報処理技術の発展には目ざましいものがあり、現在なおその進歩は衰えをみせていません。情報処理センターが設立されてから、当初の6年間は汎用機を中心としたシステムが稼働し、それまでの計算機資源に関しての飢餓状態が緩和された時期でした。これに対して、後半の6年間には、パソコンやワークステーションが安価となり、学内に急速に普及すると同時に、ネットワーク機能が飛躍的に充実した時期でした。本学の計算機システムが外部の計算機と接続され、外国を含めてtelnetやftpが可能になったのは1993年の春でした。今では、あたりまえのことですが、その当時、私はちょうど在外で、海外から自由に本学の計算機にアクセスできた驚きを今でも憶えています。その後のインターネット等の普及は周知の通りで、社会全体に多大な影響を及ぼそうとしています。このような状況の中で、情報処理センターは本学の教育・研究を支える基盤設備として重要な役割を果たしてきました。現在では学内の計算機は約千数百台に達し、高性能化と相まって、12年前を考えると正に隔世の感があります。

しかし、一方、学生の立場からみると、まだまだ不十分な点が多いように感じられます。現在、本学に入学してきた学生の利用できる端末は、附属図書館と大学会館にある約80台のパソコンのみであり、しかもその機能も限られている現状です。これらのサービスをさらにレベルアップするためには、経費や場所と同時に多くの人的なサポートを必要とします。また、学生の方へのサービスのみならず、現在のところ各学部でバラバラに行っている情報処理教育の統合や、研究基盤としての高度な情報環境のサポートなど、情報処理センターの今後の役割に対しての期待には依然として大きいものがあります。

さて、教育の世界では、小中高校へのコンピュータの本格的な導入や教材の開発が進もうとしており、大学では国際的な遠隔授業や、それに伴う教育摩擦などが話題となっています。コンピュータネットワークが、更に高速になり、画像・音声を含む大量データの高速交換が可能となれば、現在の計算機環境は一変してしまうのではないのでしょうか。このような状況に対応するためにも、情報処理センターの力量を更に高める必要があります。情報処理センターは時代と共にその役割の重心を様々に変化させつつも、常に情報化時代の教育・研究の基盤としての役割を担っており、今後ともその比重を高めてゆくものと思われまます。

この文章が印刷される頃は21世紀を迎えていることと思います。これから10年先の情報化社会を的確に想像するのはなかなか難しいことですが、当初はいわゆる「計算をさせるための機械」であった計算機は、今後は益々「情報ネットワークの高機能端末」的な性格を強めるでしょう。更に、既に普及している電子メールなどを考えればわかるように、見ず知らずの海外研究者との間で、カジュアルで会話的なやりとりが容易となるなど、長い目でみると意外に大きな文化的な影響もあるように感じます。

最後になりましたが、現在の学内の機器等が円滑に運用されているのは、情報処理センターの職員の方をはじめ、各部局でこれをボランティア的に支えて頂いている多くの方々の努力の賜であり、ここで改めて感謝致したいと思います。新世紀の情報処理センターの飛躍をお祈りします。 (2000. 12. 1)